

不登校児童との人間関係を深める援助活動の在り方

星野 政知* 黒田 浩司** 山口 豊一***

遊戯療法や箱庭療法に関する理論と方法について研究を進め、自分を表現することが苦手なA子との遊びを媒介にしたかかわりを通して、不登校児童への援助活動の在り方について体験的にとらえようとした。特に、教師と児童との関係に視点を当て、児童の活動の様子や逐語記録、箱庭作品、児童の変容などの検討を通して、不登校児童との人間関係を深める援助活動の在り方について考察した。

I はじめに

21世紀を目の前にして、子どもたちを取り巻く社会環境は、めまぐるしく変化し、子どもたちの健全な心身の発達にさまざまな影響を及ぼしていると言われている。中でも、不登校児童生徒は年々増加の経過にあり、「新しい時代を拓く心を育てるために(中央教育審議会1998/3)」においても、「不登校は、心の成長の助走期ととらえ、周囲がゆとりをもって対応する必要がある。早く登校できるようにすることにこだわるのではなく、子どもが不登校を克服する過程でどのように個性を伸ばし、成長していくかという視点をもつことが求められる」と述べられている。

今年度、9月からA子**** (小6)は、不登校になった。そこで、A子宅への家庭訪問時には、A子の望む遊びを中心にかかわることによって、心理的な安定や自信、ひいては積極性を獲得し、望ましい成長を遂げることができるのではないかと考えた。そのためには、遊戯療法や箱庭療法に関する理論と方法を学び、遊びを通じたA子との面接における活動の様子や逐語記録、変容などの検討を通して、実践的な研究を積み重ねていく必要があると考えた。

II 研究の内容

1 理論的考察

(1) 遊びとは

遊びについては、様々な学説が展開されているが、M. J. エリスの『人間はなぜ遊ぶか』では、次のように示されている。

① 剰余エネルギー説…H. スペンサーによって唱えられたもので、遊びは生活のための活動に要した残りの力が注がれるとするもの。余力がないときには遊びはあまり発展しないが、余力がない生活の中でも遊びが生まれてくることもあり、遊びが生活を支えるエネルギーを供給している。

* 緒川村立八里小学校

** 茨城大学人文学部

*** 茨城県教育研修センター

**** A子のプロフィール、作品等については、守秘義務のため変えてあります。

- ② 生活準備説…K. グロースによって唱えられてもので、人間は不完全なので、成長のために遊びを通して生活形態を学ぶとした。
- ③ 浄化説…H. A. カーらの説で、遊びによって日常生活に不必要なものを発散させると主張した。
- ④ 休養説…S. M. ラザルスが唱え、仕事の緊張からの解放を遊びの目的と考えた。
- ⑤ その他…E. D. ミッチェルの自己表現説やW. J. マクドゥーガルの競争本能説。J. ホイジンガーは人間を「ホモ・ルーデンス」としてとらえ、遊びこそ人間の本質であるとし、また、ピアジェは子どもの発達に合わせて遊び論を展開した。

このような遊びの特徴から、子どもは遊びによって緊張を解消し、休養し、創造し、成長の糧やエネルギー源を得ると考えることができる。

また、相馬壽明は、『情緒障害児の治療と教育』の中で、「遊びの心理学的意味」として、次の4点を示している。

- ① 子どもは遊びの中で、心身の諸機能やさまざまなスキルを發展させ、洗練し、統合していく。遊びは、広い意味での学習が自発的に成立する活動である。
 - ② 遊びは、行動による自己表現の機会を提供してくれる。
 - ③ 遊びを通して子どもは、現実の認識を再構成したり、現実を受け入れ、現実に対処する力を養っていく。
 - ④ 遊びを通して子どもは、自由で創造的な対人関係や相互コミュニケーションを發展させる。
- このようなことから、遊びの特徴を生かした心理療法が遊戯療法であるととらえた。

(2) 遊戯療法の変遷

鍵幹八郎は、遊戯療法の変遷を次のようにまとめている。

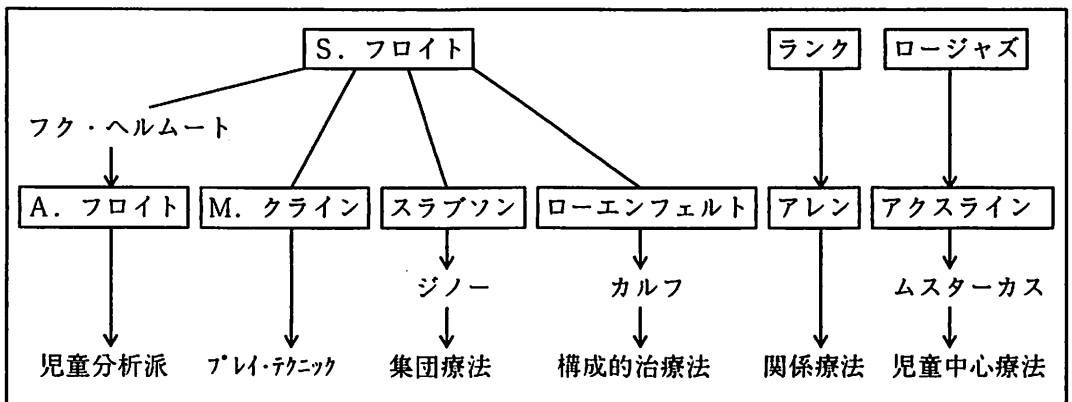


図1 児童心理療法の系譜 (鍵 1962)

(3) 遊戯療法の原理

ロージャズは、『人間論』の中で「人間は生まれつきそのすべての能力を有機体を維持したり拡大する方向へと發展させるように動いていくように思われる。」と述べ、また、V. M. アクスラインも『遊戯療法』の中で「各個人の内部には自己実現を完全に成し遂げようとしてたえまない努力を続けている、ある強い力があるように思われる。」と述べている。このことから、子

どものもつ成長への潜在的な力を信頼し、遊びに反映される子どもの気持ちを面接者が汲みとり、受容・共感的態度でフィードバックすることによって「子どもは勇気を得、よりよい成熟に達し、独立した個人になり得る」と考えられる。

また、アクスラインが明らかにした遊戯療法の8つの基本原理は、面接者としての基本的な態度が示されていると考えられる。

- ① 治療者（私は面接者と置き換えた。）は、子どもと温かい友好的な関係をつくるようにしなければならない。そうすれば、よいラポート（親和感）も早急に確立される。
- ② 治療者は、あるがままの姿の子どもを受容する。
- ③ 治療者は、子どもとの関係で、許容的な感情をつくり出すようにする。
- ④ 治療者は、子どもが表出している感情を敏感に察知し、これらの感情をそのまま返してしてやり、自分の行動の洞察しやすいようにしてやる。
- ⑤ 治療者は、子どもに自分自身の問題を解決する機会さえ与えるなら、子ども自ら解決できる能力をもっていることを深く信じて疑わない。選択し、変化し始めるか否かは、子どもの責任にしておく。
- ⑥ 治療者は、かりそめにも子どもの行動や会話に指示を与えることがないようにする。子どもがリードをとり、治療者はそれに従う。
- ⑦ 治療者は、治療を早くしようなどとはしない。治療は徐々に進歩する過程であり、治療者はこのことをよく理解している。
- ⑧ 治療者は、治療を現実の世界に関係づけておくのに必要な、また、子どもに治療関係での責任を自覚させるのに必要な制限を与えるだけである。

面接者が以上の8つの基本原理を身につけるようにすれば、子どもは面接者との関係に安定感を抱き、ありのままの自己を表現することによって自分自身と向かい合い、自分を受け止めて将来に向けて歩み出すと考えた。8つの基本原理は必ずすべてが満たされなければならないのではなく、大体において満たされていることが重要である。

(4) 面接者と子どもとの人間関係

E. H. エリクソンは、『遊具と理性』の中で、「最も明瞭な治療の条件は、子どもが玩具を持ち、自分のためになる大人を持っていることである。」と述べている。また、D・M・カルフは、『カルフ箱庭療法』の中で、「子どもは母親のやさしさの中で、保護されているということを知るようになり、信頼関係が生じてくる。(中略) 私は、子どもの治療を行う場合には、子どもとの間に信頼の雰囲気を作り出すということを自分の任務としてきたのである。」と述べ、このような関係を「母子一体性」と呼んだ。さらに、D. W. ウィニコットは、『赤ん坊と母親』の中で、「母親は赤ちゃんの中で何が起きているか知る必要はありません。しかし、抱っこしたり扱ったりする人間の信頼抜きには、赤ちゃんの発達が生じえないのです。」と述べている。これらのことは、前述のアクスラインの8つの基本原理にも通じるものであり、面接者と子どもとの関係は、母子関係の一体感に近い関係ではないかと考えられる。そして、母子関係の始まりがそうであるように、面接者と子どもとの関係の始まりにおいても、面接者は静かに抱えることが必要であり、その中で培われる信頼感をもとに、子どもは自分を意識し、見つめはじめていくのではないかと考えた。

(5) 「自由で保護された空間」

ムスターカスは、「児童の心理療法」の中で、「遊戯室は、標準・期待・圧力が感じられず、偏見が存在していないことを感じ取れるような雰囲気をかもしだすことが望まれる。」と述べている。また高野清純も、「プレイセラピー」の中で、「遊戯室は常に平和が感じられるものでなければならない。(中略)この落ち着き、調和、尊敬を感得させるのは、遊戯室だけの役割ではなく、治療者の態度も不可欠であることはいうまでもない。」と述べている。これらのことと、ドラ、M、カルフが、「カルフ箱庭療法」で述べている「自由で保護された空間をわれわれの関係の中に作り出す。」とは、同義であり、遊戯室の保護された空間と面接者によって心理的に守られている空間を、「自由で保護された空間」として構成することが大切であると考えた。そして、このような場面を設定することによって、子供が落ち着きを取り戻し、不必要に失敗や欲求不満や恐れや不安を経験せず、自由な雰囲気の中で自己を表現することができるようになる考えた。

さらに、遊戯室について、アクスラインは、「専用の遊戯室を設けることが望ましいが、絶対に必要であるわけではなく、普通の教室の隅やあまり使われなくなった部屋の片隅で、治療者が面接の都度、スーツケースに遊具を入れて通って行く場合もあった。」と述べ、訪問面接においても遊戯療法が可能であることを示唆している。

(6) 遊戯療法の治療的要因

高野は、前述した著作「プレイセラピーの治療機制」中で、治療的要因としてカタルシス、洞察、転移などを挙げている。

① カタルシス (感情の解放)

カタルシスとは、鬱積された感情の浄化、表現あるいは解放と定義される。遊戯療法に限らずすべての心理療法の目的は、内心に秘められた問題の解決を助けることである。それゆえに、まず、その私的な内心の問題について自由に表現させることは不可欠の条件となる。このことによって、治療者は解決すべき問題の性質と所在を知ることができるし、問題解決のための援助の方針を立てることもできる。一方、子どもも、自分の問題を別の視点で多面的に見ることができ、日常生活では、防衛のために見えなくなっていた目をあけて、自分の欲求や感情の特性を率直に見直し、理解できるようになる機会を経験する。少なくともカタルシスは、遊戯療法の最終目的である洞察に導くために欠くことのできない準備条件といえるであろう。

② 洞察

前述のカタルシスと同様に、心理療法で使われる洞察 (insight) ということばは、いろいろな意味を持っている。すなわち、自己の基本的な、無意識的な動機の理解ということの意味する場合もある。また、過去の経験と現在の行動との間の関係の理解ということにも関係している。時には、治療過程に生じる学習の一種と同じ意味で用いられる。さらに、それは突然の認識という意味であり、症状の隠れた意味を理解することにも用いられる。ある治療者にとって、それは言語によって表現されたものであったり、非言語的なものを意味したりする。それに対して、他の治療者は言語化されうるものだけをさす。遊戯療法の場合は、洞察がことばで表現されたり、子どもが自分の洞察に気づくということは必ずしも必要ではないとされる。

③ 転移

精神分析では、クライアントがセラピストとの関係において、重要な他者との関係を再体験することであり、この転移関係を通して、クライアントは自己や自己の経験を再統合して、人格を成長させる。

(7) 遊戯療法の治療過程

東山弘子は、『心理臨床大辞典』の中の「遊戯療法」の概況において、おおよその段階を次のように示している。

① 初期段階

初回に場面構成をする。その枠に守られて、最大限の自由とイニシアティブが子どもに約束される。セラピストは受容的、許容的、共感的な、温かい治療的關係を樹立するように心がける。

初めは、不安そうに立ちすくんだり、ようすを伺うような態度を示すが、セラピストの受容的在り方が分かってくると、安心して自分のありのままの情緒的表出がはじまる。

② 第2段階

子どもの自発的な遊びが展開される。セラピストは子どもの遊びの中に現れる情緒的表現をとらえながら、子どものプレイの表現を受け止めていく。プレイ・セラピのプレイは、子どもにとっておとなの夢と同じ程度の迫力に満ちた、内界の表現手段である。

③ 第3段階

第2段階に引き続いて自己表現が深まる。防衛が徐々にゆるむにつれて、キーパーソンに対する否定的な感情があらわになり、攻撃的感情を表現する遊びが多くなる。自分の問題の中核に触れる強さが育ってくる。

④ 第4段階

自己に対する肯定的な感情が優位になる。内的世界の統合ができはじめると、現実が少し違って見えるようになる。自分が変わったのだが、プレイ・ルームが変わったという子どもや、現実の話題が多くなる。また、これまでの過程を整理したり、作品が完成したりする。そして、子どもの方から終結を告げる時がくる。

(8) A子へのかかわり

A子は、言葉や文章による言語表現は苦手であるが、砂遊びや図画工作などは生き生きとして活動する。そこで、箱庭を含めたA子の望む遊びを中心にかかわっていこうと考えた。そして、遊びの中に現れるA子のありのままの気持ちを受け止めることによって、A子が、十分に受容され、支えられていると感得できれば、自由に自己を表現していく過程の中で、変容していくのではないかと考えた。

2 実践を通しての考察

(1) A子のプロフィール

A子は、小学6年生で、以前から登校をしぶる傾向があり、今年10月から不登校に陥った。A子は、素直な性格で教師や親の言うことをよく聞き、体育や音楽、図工などを好み、表面上は何ら問題となるような様子は見られなかった。しかし、授業中の発表の声は小さく、休み時間など教室で過ごすことが多く、積極的に友達と遊んだり、子供らしく無邪気に遊んだりすることが少なかった。そして、長期休業中の友達関係や家庭生活、学校生活等の問題が絡み合っ、登校できない状況になってしまった。そこで、家庭訪問（訪問面接）を通して、A子のありのままの気持ちを受け止めて、まず信頼関係作りをすることが大切であると考え、遊びを通してかかわりをもつようにしてきた。

(2) 援助活動の経過

【4月】 欠席なし

【5月】 欠席日数4日(5/6, 21, 29, 31)

母親から、かぜや頭痛のため欠席すると連絡があった。連休の前後の欠席が母親も気になっているという話であった。登校した日は、学習や生活全般において積極的に活動する。

5/25(金)の陸上記録会には、800mとリレーの選手として活躍する。

【6月】 欠席日数4日(6/16, 28~30, 7/1)

5月末に欠席が続いたが、6月に入ると元気に登校した。

6/28~7/1まで欠席が続いたので、7/1(木)に家庭訪問を行った。母親は、「陸上記録会や少年団活動(6/26)で疲れていた様子も見られたが、6/29, 30, 7/1と、日中は元気に過ごしている」とのことだった。

【7月】 欠席日数3日(7/1, 6, 13)

7/1(木)の家庭訪問以後、また元気に登校した。水泳学習や夏休みの計画、村のふれあいの船の話など、みんなと一緒に楽しそうに活動する。終業式にも参加した。

7月末には、ふれあいの船で八里小、小瀬小の6年児童全員で北海道旅行に出かけ、A子も参加した。

【9月】 欠席日数10日(9/1~3, 13, 21~10/1)

9/1(水) 頭痛のため、欠席すると連絡がある。放課後、家庭訪問を行った。A子は話さなかった。担任の話(A子のやりたい係、新しいグループなど)にも目を合せようとせずうなづく程度。8月末の少年団のキャンプのとき、腹痛でみんなの中に入れなかったと母親から話を聴く。

9/2(木) 夕方、家庭訪問を行った。夏休みの課題(北海道旅行の絵など)を見せてくれ、作品のできばえについてほめ、作品を預かった。母親は、朝になると調子が悪くなり、夕方、仕事から帰って来ると、とても元気だと話す。

9/3(金) 夕方、家庭訪問を行った。夏休みの課題(アイデア貯金箱)が途中だったので、一緒に作る。作文が終わっていないこと、仲のよい友達から電話があったと話してくれる。夏休みの課題(作文など)が、負担になっているのではないかと母に話をした。

9/4(土) 登校し、代表委員会に参加し、運動会のスローガンについて話し合う。

9/6(月)~9/10(金) 運動会の係決めや運動会の全体練習、鼓笛練習などみんなと一緒に行った。作文の提出期限が迫っていた。

9/13(月) 母親から欠席の連絡を受ける。放課後、家庭訪問を行った。作文を手助けを受けて仕上げた。

9/14(火)~9/18(土) 運動会の練習などを熱心に行った。

9/19(日) 運動会に参加し、個人や団体、親子種目、係活動で活躍した。

9/21(火) 放課後、家庭訪問を行った。A子は部屋から出てこなかったが、両親に会い、話を聴く。母親は、また休みはじめたことでいらいらしている様子だった。本人に対して強い姿勢で臨むことも必要であるかもしれないという話が聴かれた。朝の様子も知りたいことを話し、朝、夕の家庭訪問を約束する。

- 9/22 (水) 朝, 家庭訪問を行った。登校をうながす父親に反抗的な態度を示し, 担任の顔を見ると, トイレに入ったきり出てこなかった。夕方家庭訪問を行った。A子本人が, ちょうどTVゲームをしていたので, ゲームを見せてもらいながら, ゲームの内容などについて話を聞いた。朝の状況からも本人の気持ちがかなり苛立っている様子なので, 母親とは, 本人が落ち着くまで様子を見ろということでも共通理解する。
- 9/24 (金) 朝, 夕, 家庭訪問を行った。朝はふとんから出ず, 枕元まで行き, 声をかけた。夕方は, 本人に遠足の話などをしたが, 笑顔も見せてくれた。
- 9/27 (月) 朝, 夕, 家庭訪問を行った。朝は, 本人に会えなかったが, 母親から前日に男子のサッカーの試合を見せに連れて行き, 下級生から冷やかされたことを聴く。夕方の家庭訪問では, TVゲームを見させてもらった。リラックスした雰囲気を感じられた。
- 9/28 (火) 朝, 夕, 家庭訪問を行った。朝は, ふとんから出たが, 毛布にくるまって顔を見せたがらなかった。昨晚, 剣道教室を一緒にやっているの友達とその親たちが訪れ, 母親を励ますと共に本人にも声をかけてくれたと, 母親から話を聴く。これまでは, ノートをコピーして, 夕方の家庭訪問のときに本人に渡していたが, 学級の女子からノートを交代で書いてあげようという意見が出たので, ノートを書いてもらい届けることにした。夕方の家庭訪問のときにそのことを伝えと, 笑みを浮かべていた。算数の勉強をしようと誘うとノートと教科書を用意し, 一緒に勉強することができた。
- 9/29 (水) 母親が始業に少し遅れて, 車で本人を送ってくる。本人は車から降りようとせず, 担任が声をかけてもバスタオルで顔を隠していた。教室に入るのは, 無理な様子(着替えていないなど)だったので, しばらくしてから下校してもらおうよう話をした。夕方の家庭訪問では, 本人の話は聴くことができなかったが, 一日, 母親が会社を休みA子と一緒に, 料理など作った話を聞いた。
- 9/30 (木) 朝はみんなと一緒に起きて, 朝食をとっていた。あいさつは返ってこなかった。夕方の家庭訪問では, 「先生, どうぞ」といって, TVゲームを用意してくれる。ていねいに教えてくれ, 担任は教わりながら練習する。

【10月】 欠席日数17日

- 10/ 1 (金) 朝方は起きていたが, 学校へ行く意志はない様子であった。夕方の家庭訪問で, 遠足の話をする, 明日は学校に行くと本人から答えた。
- 10/ 2 (土) 朝, 訪問するとジャージに着替え, 登校の準備をしていた。その後, 母親に送られ, 登校した。友達から声をかけられ, にこにこしながらあいさつを交わしていた。遠足の事前学習など, みんなと一緒に活動し, 遠足の買物の相談などを仲の良い友達としていた。
- 10/ 4 (月) 一日学校で過ごした。遠足のグループの班長に選ばれるなどして, 笑顔が絶えなかった。
- 10/ 5 (火) 遠足に参加し, 仲の良い友達と一緒に行動した。
- 10/ 6 (水) 遠足の疲れもあったようで, 朝起きて来れなかった。夕方の家庭訪問では, 楽しかった遠足のことを話してくれた。
- 10/ 7 (木) ~13 (水) 朝は起こされて一度は起きるが, 毛布にくるまったりして着替えなどを拒む様子が見られた。夕方の家庭訪問では, 元気な様子で, 友達の書いてくれたノートに目を通したり, TVゲームを用意して一緒にゲームを行った。

- 10/14 (木) 弟がぜんそくのため、入院し、母親が病院で付き添った。A子は朝も一人で起き、学校の用意をして、父親に送ってもらった。音楽会の練習をみんなと一緒にいった。K先生から再度ピアノ伴奏を頼まれ、快く引き受けた。TVゲームと一緒にいった。
- 10/15 (金) 一日登校すると、かなり疲れるらしく、朝は起きられなかった。枕元で声をかけ、夕方、また来ることを話すとうなづいた。夕方の家庭訪問では、弟の様子や明日の親子レクに参加したいことを話した。夜、ピアノ教室に行く。
- 10/16 (土) 父親に送られ、登校し、親子レクのソフトバレーボールやビデオ鑑賞をみんなと一緒にいった。母親は後から参加した。放課後は、ミニバスケットの少年団活動にも参加した。
- 10/17 (日) ミニバスケットの大会に朝から参加し、試合でも活躍が見られた。
- 10/18 (月) ~10/21 (木) 朝の家庭訪問では、1度起きてもまたごろごろしている様子が見られた。ノートを借りていくことを告げると、机からノートを取ってきて手渡してくれている。夕方の家庭訪問では、子供部屋で、弟たちと本人と担任の4人(後から母親が加わる)で、ゲームのことなどを話題にした。A子からは、たくさんの会話が聴かれた。
- 10/22 (金) 朝、うかがうと着替えもすんで登校しようとしていた。母親の話では、強行手段に出たとのことだった。音楽会の練習でピアノを弾くが、本人にとって満足のいくものではなかったようであった。
- 10/23 (土) 剣道大会に選手として出場した。午後は、仲の良い友達と楽しく遊んだ。
- 10/25 (月) ~10/30 (土) 朝は起こされて起き、食事も家族と一緒にしているが、テレビを見ていて、着替えや学校の用意をしようとはしない。両親や弟たちが出かけてしまうともう1度ふとんにもぐりこんだりしている。夕方の家庭訪問では、TVゲームと一緒にやりながら、その日の様子を話してくれる。母親はピアノの伴奏が負担になっているのではないかと話してくれる。ピアノの伴奏については、心配しなくていいことを話した。
- 10/28 (木) 剣道教室とその後のママさんバレーに参加した。
- 【11月】 欠席日数21日
- 11/ 1 (月) 音楽発表会。朝の訪問では、ふとんから出て来なかったもので、夕方、また来ることを告げた。夕方の家庭訪問では、音楽発表会のことにはふれず、一日の様子を聞く。一日テレビを観て過ごしたとのことであった。
- 11/ 2 (火) 朝と夕方に家庭訪問を実施した。土曜日に収穫祭があることを話したが、あまり興味を示さなかった。
- 11/ 4 (木) 村の文化祭に向けて、クラスみんなの作品づくりの様子を話し、画用紙を渡した。TVゲームをしながら、絵画のイメージを聴かせてくれた。
- 11/ 5 (金) 朝、家庭訪問を実施した。絵画の下絵を見せてくれた。彩色のアドバイスを加え、励ました。放課後、校内生徒指導委員会を開催した。これまでの状況と今後の対応について協議した。
- 11/ 6 (土) 母親が、知り合いの相談関係の仕事をしている方のところを訪問し、話を聞いてもらい、家族の対応等を助言していただいたとのことであった。

- 11/ 8 (月) 朝と夕方、家庭訪問を実施した。朝は、起こされて起きた様子で言葉かけにうなづく程度であった。夕方の訪問では、絵画の出来映えが気に入らない様子であったので、その日のうちに画用紙を届けた。
- 11/ 9 (火) 一日中、絵画の作品づくりに取り組み、作品が仕上がった。絵画の出来映えについて称賛し、本人も満足気であった。
- 11/10 (水) ~12 (金) 朝は起こされて起き、家族と一緒に朝食をとっていた。昼食は、子供部屋で祖父母とは別に食事をしている様子であった。編み物を始めたらしく、小物入れなどを編み、見せてくれた。担任も編み方を教わって練習をした。
- 11/12 (金) 生徒指導に係る訪問指導。今後の対応について助言をいただいた。
- 11/13 (土) 村の文化祭に母親と出かけた。クラスの友達(0子)と会い、昼食を一緒にした。
- 11/15 (月) ~17 (水) 本人には、18日の予防接種について参加できるかどうか話したり、授業のノートを手渡し、学校の様子を話したりした。母親には、訪問指導での助言について話し、校長との面談のことなど話し合った。
- 11/18 (木) 予防接種を受けに午後登校し、接種後帰宅した。エアホッケーやトランプなどを参し、本人の希望したエアホッケーで対戦ゲームをした。
- 11/19 (金) ~30 (火) 朝食は家族と一緒にとっているが、登校しようという意思は感じられない。担任の言葉かけに「いってらっしゃい」との返答が、時折返ってきた。夕方の訪問では、祖母の用意してくれたおやつなどを食べながら、TVゲームを一緒にしたり、その日の様子を話してくれたりした。
- 11/20 (土) 弟の親子活動で母親が来校した。母親は校長先生と面談を行い、助言を受けた。
- 11/27 (土) 弟の七五三の記念に、兄弟で母親の実家に写真を撮りに行った。
- 11/29 (月) 夕方の訪問の時に、七五三の写真を照れくさそうに見せてくれた。担任の「とってもきれいだね」の言葉かけに笑みを浮かべていた。

Ⅲ 研究のまとめ

私は、不登校児童との人間関係を深める援助活動の在り方を究明するために、A子との遊戯療法を取り入れた面接を通して研究を進めてきた。

その結果、次のようなことを体験的に理解することができた。

- (1) 遊戯療法を取り入れた援助活動では、児童と面接者との信頼関係が基盤となる。
- (2) 遊戯療法を取り入れた面接において面接者が、「自由で保護された空間」を心掛けることによってクライアントとの人間関係が深まるとともに、クライアントは、自由に自己表現を行い、自己治療力が発揮されてくる。
- (3) 言語による自己表現が苦手なクライアントにとって、自己を表現する方法として遊戯療法は有効である。

Ⅳ おわりに

今回の研究を通して、私は、「母子一体性」や「自由で保護された空間」の大切さと難しさを痛感した。それでもA子は、遊戯療法を取り入れた面接を通して、表情が明るくなり、自分の気持ちを素直に表出できるようになるなど、人間関係を深めることができた。援助活動を通して、児童を温かく見守り、児童との信頼関係を培っていくこと、また家庭の中で十分受容されることが大切であることを学んだ。

最後に、以下の課題を挙げて、これからの研究の指針としたい。

- (1) A子との面接を継続し、A子の成長に寄り添うとともに、遊戯療法や箱庭療法を取り入れた面接について、さらに研究を深めていきたい。
- (2) 自らの教師としての資質の向上を図るため、様々な援助活動の在り方について、研究を進めていきたい。

〈引用・参考文献〉

- (1) M. J. エリス著、森楸・大塚忠則・田中亮胤訳『人間はなぜ遊ぶか』黎明書房、1972.
- (2) 相馬壽明『情緒障害児の治療と教育』田研出版、1995.
- (3) 鎌 幹八郎『児童心理療法の発展(1)』青少年問題研究、1962.
- (4) C. R. ロージャズ著、村山正治訳『人間論』岩崎学術出版社、1967.
- (5) V. M. アクスライン著、小林治夫訳『遊戯療法』岩崎学術出版社、1972.
- (6) E. H. エリクソン著、外林大作訳『遊具と理性』誠心書房、1968.
- (7) D. M. カルフ著、河合隼雄訳『カルフ箱庭療法』誠心書房、1972.
- (8) D. W. ウィニコット著、成田善弘・根本真弓訳『赤ん坊と母親』岩崎学術出版社、1993.
- (9) C. E. ムスターカス著、古屋健治訳『児童の心理療法』岩崎学術出版社、1968.
- (10) 高野清純『プレイセラピー』日本文化科学社、1998.
- (11) 東山弘子『心理臨床大辞典「遊戯療法」』岩崎学術出版社、1974.
- (12) 河合隼雄編『箱庭療法入門』誠心書房、1969.